

1章 授業アンケート回答の分析

1. 授業アンケート質問項目について

昨年度には授業アンケートの質問項目に関して見直しをおこなった。主な変更点は、学生側の義務や態度を問うような質問を排し、授業に関して学生がどのように受け止めたのかという内容に統一した点である。

今年度の質問項目も昨年度を踏襲しているが、まだ2年分のサンプルしか集まっていないことから詳細な比較分析はおこなわなかった。明確な問題が無い限り、経時的データ分析が可能となるまで質問項目の変更は避けた方が良いと思われる。

2. 授業アンケート回答の分析

授業アンケートを実施した全60授業に対する各質問項目の平均値を図1に示した。概ね高い得点だがQ3の「予習復習が必要だったか」を問うものが特異的に低かった。また次に平均値が低い項目はQ4の「質問や発言がしやすい雰囲気だったか」を問うものであった。これらの傾向は昨年度と同様である。

予習復習の必要性が低い授業は学生にとって“良い”科目とみなされているのかも知れない。したがって、本来の意図とは別に、この質問項目に限り学生にとっては低い得点=高評価なのではないかと考えられる。Q4の結果からは、学生が主体的に授業に取り組めるような工夫をおこなう余地がまだ多数あると考えられる。

これらアンケートの結果は、全科目の平均値と各教員の担当科目の平均値との比較ができる形で教員に返却した(図2)。これによって、他の授業と比べて高く評価された項目と、低く評価された項目を把握し、今後の授業に活かす参考資料となると考えられる。

学生側から頻出する意見として、実際に改善を願う授業ほど授業アンケートをおこなっていないというものがある。実際、今回の授業アンケートは原則的に全教員にお願いしたものであるが、実施率は50%程度である。したがって、より高い回収率を達成するための方策が必要であると考えられる。また一方で、授業アンケートの有効性に関する疑問もある。授業アンケートをなぜおこなうのか、そもそも必要なのか、どういった利用法があるのかといった基本的な問いから考えなおし、説明することも必要なのではないかと思う。

質問項目

Q1: 授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか

Q2: 授業の進度は適切でしたか

Q3: 授業内容を理解するためには普段の予習や復習が必要不可欠でしたか

Q4: 授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか

Q5: 授業内容は理解出来ましたか

Q6: 大学の授業にふさわしいレベルの内容を学べたと感じましたか

Q7: 授業に満足していますか

Q8: 授業はあなたのためにたったと思いますか

Q9: 授業はあなたの知的好奇心を刺激しましたか

Q10: この授業の履修を他の学生にも薦めたいと思いますか

- Q11: 教師の話し方は明瞭で聞き取りやすいものでしたか
 Q12: 教師の説明の仕方は分かりやすかったですか
 Q13: 資料（板書，プロジェクター，配布資料）の内容は明瞭に見てとることができましたか
 Q14: 授業は時間通りに行われましたか
 Q15: 質問には丁寧に対応してくれましたか
 Q16: 授業に対する教師の熱意を感じましたか

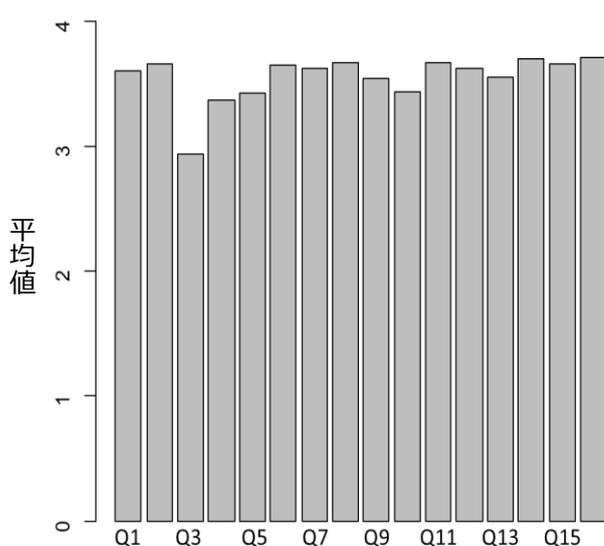


図1 各質問項目に対する全科目の平均値

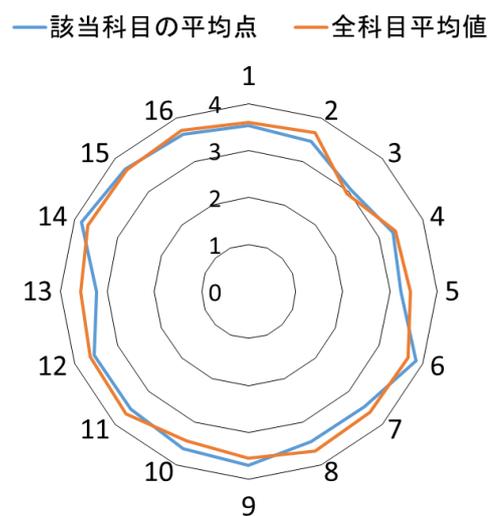


図2 各教員に返却した図の例

該当科目と全体の平均が比較できるようにした。円の周囲の数字は各質問項目，円内の数字は平均得点を示す。

2章 平成26年度教育学部授業公開報告

1. 授業公開の実施計画

鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針のFDの定義にある「～教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上をはかるとともに、学生支援を行う自発的な取組」により、本学部の教育改善委員会においても各教員による授業公開・参観を行うこととした。本学部の授業公開の目的は「教員同士が相互に授業を公開・参観することにより、各教員が授業方法・授業運営の改善をはかり、教育の質的向上を目指す」としている。

昨年度までの実施状況を顧みると、徐々に参観数が減少している傾向が見られる。教員自身の意識の低下も考えられるが、仕事量の増加にともない提供された授業を参観する時間が失われているのではないかと考えられた。そこで、今年度は一人でも多くの教員に参観の機会を提供すべく、前期と後期にそれぞれ授業参観期間を設けることとした。

(1) 授業公開の枠組み

実施方法は、基本的に昨年度の方法を準拠して行った。教育学部所属の教員に必ず一つは提供するよう依頼し、提供された授業公開科目一覧表をもとに参観する教員が授業提供者に事前に連絡を行い、確認を行ってから当日に参観する方法を行った。

(2) 授業公開科目の調査

前期授業公開については、事前に教授会で報告した後に平成 26 年 5 月 21 日（水）～5 月 30 日（金）の期間で授業公開に関する調査を行った。調査内容は、①授業公開実施科目名（曜日・時限・科目名・講義室）、②受入可能人数（人数を指定する場合、人数を記載）であり、それらを各専修世話人に報告しもらい、専修世話人は、それらを一覧表にして教育改善委員会の担当者にメールで転送をしてもらった。

後期授業公開も同様の内容の調査について、教授会で報告後、平成 26 年 11 月 19 日（水）～11 月 28 日（金）の期間で授業公開に関する調査を行った。

(3) 授業公開科目一覧と授業参観報告書書式の提示

各専修世話人から提出された資料を集約し、前期授業公開については平成 26 年 6 月 4 日（水）に、また後期授業公開については平成 26 年 12 月 3 日（水）に教育学部全員に授業公開科目一覧表と授業参観報告書の書式を配布するとともに、授業公開実施要項を提示した。各教員の諸事情により授業公開科目一覧表の内容に変更等が生じた場合は、その都度訂正版を全教員に配布した。授業参観者は、授業参観報告書を提出することを原則とした。また、授業公開科目一覧表は、本学の他学部に対しても送付された。

(4) 授業公開及び授業参観の実施

前期授業公開期間は平成 26 年 6 月 9 日（月）から 7 月 11 日（金）までを、また後期授業公開期間は平成 26 年 12 月 8 日（月）から平成 27 年 1 月 23 日（金）までとし、この期間中に各教員は、授業公開および授業参観を実施した。

(5) 授業参観報告書の提出

授業に参加した教員は、前期授業公開については平成 26 年 6 月 9 日（月）から 7 月 25 日（金）までに、また後期授業公開については平成 26 年 12 月 8 日（月）から平成 27 年 2 月 6 日（金）までに授業参観報告書の提出することが求められた。

(6) 授業公開のまとめ

提出された各教員の授業参加報告書をもとに、教育学部教育改善委員会が集約、整理を行った。

2. 授業公開の実施状況

授業参観報告書を集計、整理した結果、平成 26 年度教育学部授業公開の実施状況は以下のとおりであった。

(1) 授業公開科目数

前期授業公開については、公開科目として 97 科目の登録があった。このうち 1 科目は、7 名の教員の連名で登録があったものである。また一つの科目を複数名で担当している授業について、それぞれの担当日ごとに登録されているケースがあった。参観者が目的を持って参観授業を選べるよう、授業担当者が異なる授業については、授業名が同

じであっても別の授業として一覧表に載せている。参加教員数は、97名であった。理由を確認してはいないが、1名の教員の授業提供はなかったが、ほぼ全ての教員から授業の提供があった。

後期授業公開については、公開科目として98科目の登録があった。このうち1科目は、5名の教員の連名で登録があったものである。前期と同様に一つの科目を複数名で担当している授業について、それぞれの担当日ごとに登録されているケースがあった。参加教員数は、97名であった。理由を確認してはいないが、3名の教員の授業提供はなかったが、ほぼ全ての教員から授業の提供があった。

(2) 授業参観件数

前期授業参観について、提出された授業参観報告書は27通であり、昨年度の27通(後期実施)と同数であった。後期授業参観については、提出された授業参観報告書は17通であり、前期に比べると大幅に低下している。

平成23年度の授業公開から、参観者は20名から30名の間で推移しており、今年度についても同様の結果になった。特に後期授業公開については前期との組合せの意味で行う旨を広報していたのが減少の理由に考えられる。

3. 授業参観報告書における記述

多くの報告書に共通する内容は、参観でよかった点や工夫や配慮についての具体的な記載であった。以下に「授業参観者が、よい、あるいは取り入れてみたいと評価した授業の方法」と「参観授業の改善のための工夫」の2つにわけて紹介をしたい。

(1) 授業参観者が、良いあるいは取り入れてみたいと評価した授業の方法

【授業の導入】

- ・ 前回の授業の最後に受講生に書かせたコメントを1枚のプリントにまとめ、授業の冒頭で受講生にフィードバックさせることで、他の受講生の感想などに触れさせ、授業内容についてより一層の理解が得られるよう働きかけられていた。
- ・ 前回の授業の振り返りにおいて、受講生の提出した課題の中から、相互評価の高いものが配布資料として紹介されており、受講生の関心や主体性を引き出すため非常によく練られた仕掛けになっていると感じた。
- ・ 語学の授業であるが、導入で地図を用いて地理的な状況と自身の経験談を結びつけて背景を説明することで、学生への動機付けがきちんとなされていた。
- ・ 導入部分では、学生の興味を引くような教材を持ってきており、まずは自分で考えさせる、次に全員で意見を出し合うという、学習効果の高い手法を取られていた。教材選択、発表手法にも工夫があることが、とても参考になった。

【授業の展開】

- ・ 小集団での話し合い活動が複数回に別けて設けられていた。その中でもペアーで議論させ、ペアーの考えを発表する機会を設けることにより、各課題を自分自身の課題として捉えさせられていた。
- ・ 授業の場面ごとに受講生の発言内容のポイントやキーワードをホワイトボードに適時整理されていた。

- ・授業の最後の5分間を用いて、本時の感想やまとめをコメント用紙に記入させ、授業内容の整理を促されていた。
- ・授業の中で、身近な附属学校での活動のビデオ映像が紹介されており、受講者の興味関心を引く様に工夫されていた。
- ・教卓に貼りついたままということがなく、絶えず受講者の中に入っていき、個々人と全体とに絶えず気を配っていると感じられた。
- ・相手の言うことを聞くときは、話し手の方を向くというコミュニケーションの基本的なことができていないときは、しっかりと指摘し、改めさせていた。
- ・受講者がずっと座り放しではなく、時には立ってグループ内で議論させ、内容がまとまったら座らせることで、視覚的にクラス全体の進捗状況がつかめるような指示もなされていた。
- ・よい意見には拍手を送ることで、互いのよい点を評価し合い、他者のよさに気づかせ、教員の側からもそれぞれの発言をほめることで受講者の意欲がさらにかきたてられていると感じた。
- ・教室では、机をコの字に並べ替え、全員がお互いの顔を見ながら話ができるように配置されていたため、学生が積極的に発言しやすく、また教員のレスポンスも早かった。
- ・授業終了後には、学生達に「シャトルカード」が配布され、授業の感想や気付き学んだ事、質問等を書いて提出し、教員がそのカードをチェックして学生の理解度を把握し適切な指導が出来るようなシステムになっていました。双方向授業の進め方の一つとして、「シャトルカード」はとても参考になりました。
- ・受講生が創ったデジタル絵本と幼児の男の子がつくったデジタル絵本が面白く、最近では児童や青年のクリエイティビティを伸ばす教育が行われていることを知って驚いた。
- ・授業では、ランダムに指名した学生からすぐに質問が出ない際、根気よく質問を待つ姿勢が印象に残った。発言しないままではいけないルールが周知されていると伺った。
- ・覚えさせる場面では、学生たちにスライドに書かれた言葉を読ませていました。大事な部分は、単に赤字・太字で示して講師が「ここ大事！」と説明するだけではなく、学生に精読させることもひとつの方法であることを学びました。
- ・学生の授業検討会は「発問に答えにくかった」とか「説明が長かった」といった表面的な意見に終わることも多いのですが、模擬授業前に授業検討の観点をプリントにして配付されており、模擬授業後の授業検討を焦点化しようとすることも勉強になりました。
- ・体育館での授業実施において、授業担当者の先生は、マイクを使用し、適宜指示や指導を行っていたことである。私自身は、可能な限り、自身の「声」を出すことで指導内容を伝えることを前提として授業展開をしている。学生たちに、指導内容を明確に伝えるためには、マイクの使用については、採用を検討したいと強く考えた。
- ・講義内容は一見易しいが、じつは深遠な問題を扱っていて、大学の講義に相応しい内容であった。学生の理解度だけを評価の尺度にするのは間違っている。

- ・作品や出席のみならず，授業態度（例えば，作業が進んでいる学生が，遅れている学生を助ける等）も加味して評価されるとのこと。授業内容にもよるが，教育学部の場合，このような評価の観点も重要に思われた。自らの評価にも取り入れたいと思う。
- ・学生自身が被験者となって実験に参加する機会や，実験の結果について学生同士でディスカッションする時間を設けるなど，理論と現象の往復ができるように，さまざまな工夫がなされていました。
- ・学生との質疑応答に多くの時間を割くことで，学生の理解度を確認しつつ授業を進行できるメリットがあることを認識した。さらに，プリントの記載内容を充実させることで，学生の知識の整理に役立っていると感じた。
- ・学生が模擬授業の中で見せた板書や発問，資料提示や生徒役の学生とのコミュニケーションの取り方など，教育実習での学生の姿と重なることができました。ここまでの講義の過程の様子を知りたいと思うことであった。
- ・導入部分のリラックスした雰囲気から，講師の熱のこもった態度に，学生も真剣な表情を見せ引き込まれている様子が伺えた。
- ・実験の課題の中に難易度の高い目標も盛り込んでいたため，学生間，学生-教員間で自然に議論がおこっており，その議論に沿って理論的知識を教授するといった工夫も参考になった。
- ・101号室という大講義室での授業でしたが後のほうからも板書の文字がよみとれ，声も良く聞き取れました。
- ・何かと学生に手を挙げさせていました。「当てない安心感」があったので，学生が手を挙げるのができていた気がしました。先生が普段から当てないのか，本時のみ当てなかったのかはわかりませんが・・・。当てるにしても，「間違えてもよい雰囲気」を作るんだろうなあと想像しました。
- ・月曜日の1限目ということもあり，若干遅刻してくる学生が気になりましたが，欠席せず，送れても授業に出るということは理解を深めたいとの思いがある証拠だろうと思うことでした。
- ・また，二つ目の詩はこれから！というところで終わりにされたので，学生さんたちはこの先どうなるのか気になったのではないかと思います。こういう形で次回への興味に繋げていく方法も非常に有効だと思いました（私自身，続きが気になって仕方がなかったので，つい頑張って先も読んでしまいました）
- ・今回の授業資料として，実験の手順を示す資料のみならず，当該実験に関する科学的な知見に関する資料，当該生物を活用した理科授業に関する資料が準備されており，理科教師として必要な知識をバランスよく習得できるようになっていた。
- ・運動量も十分に確保されており，導入，実技の一連の授業の流れは，学生に教員の意思が十分に伝わるものであった。ラグビーは危険なスポーツと思われがちであるが，安全面にもしっかりと配慮があり，非常に参考になった。
- ・写真（スライド），口頭での講義，板書，学生への問いかけなどバランスの良い授業である。板書の時間が学生にとってはノートをとる時間になるということを改めて認識できた。

- ・講義の中では、板書はほとんどなされなかった。板書をほとんど必要としないほど、講義資料が充実していた。講義資料と講義担当教員の講義を聞いていれば、講義内容は大体理解できた。
- ・講義は説明ばかりでなく、順番に受講生に考えを述べさせたり、簡単な作業を手伝わせたりして、適度な緊張感やメリハリを付けている点も学ぶべき点が多かった。また、Evernote が教材管理のツールとして用いられていた点も新鮮であった。
- ・表現技術だけでなく、曲そのものへの理解力がなければ、聴く人を感動させるような響きは生まれてこない。それを念頭におくことの大切さもまた、授業の中でさりげなく、だが確実に伝えられていたと思う。

(2) 参観授業の改善のための工夫

- ・課題を手順と異なる方法で作成している学生が少数ながら見られ、最終段階で作り直す例も見られたので、作業中のチェック回数を増やすか、可能であれば TA を用いて指導させた方がいいかもしれない。
- ・教室が仮設教室であったが、多数の蚊が部屋の中を飛び回っているという環境でした。蚊などの発生を予防する措置を早急に図る必要があると思います。
- ・物理的に難しいかもしれないが、各個人あるいは小グループそれぞれのアイデアで多くの実験ができると良いと思った。
- ・廊下側の蛍光灯を消さないとスライドが見えないという理 401 教室の電灯の区分けのためなのですが、スクリーン前方の明かりだけを消せるように電灯回路を変える必要があると思いました。
- ・道具の使用方法について説明するなかで、その道具の危険性に関する内容が少々抜けていたように感じたので、追加するとより安全に授業が行えるのではないかと。

4. 授業公開のまとめ

教育学部における授業公開は、平成 18 年度から開始され、今年度は 9 回目の実施であった。

授業を公開した専任教員の割合は、残念ながら 100%には至らなかったが、ほぼ全ての教員に公開授業の提供を行った。オムニバス形式の授業を考慮し、複数の授業を提供された教員もいた。また、授業参観者数の推移は図 1 に示した通りとなった。今年度の参加者数が、前期授業参観において 27 人、後期授業参観においては 17 人であった。後期授業参観において報告書を提出した教員のうち前期も報告書を提出した教員は 15 名であり、参観者の固定化が予想される。しかし、2 名の教員が新たに後期授業参観に参加しており、全体では参観した教員数は 29 人となった。参観のべ回数は 44 回であった。

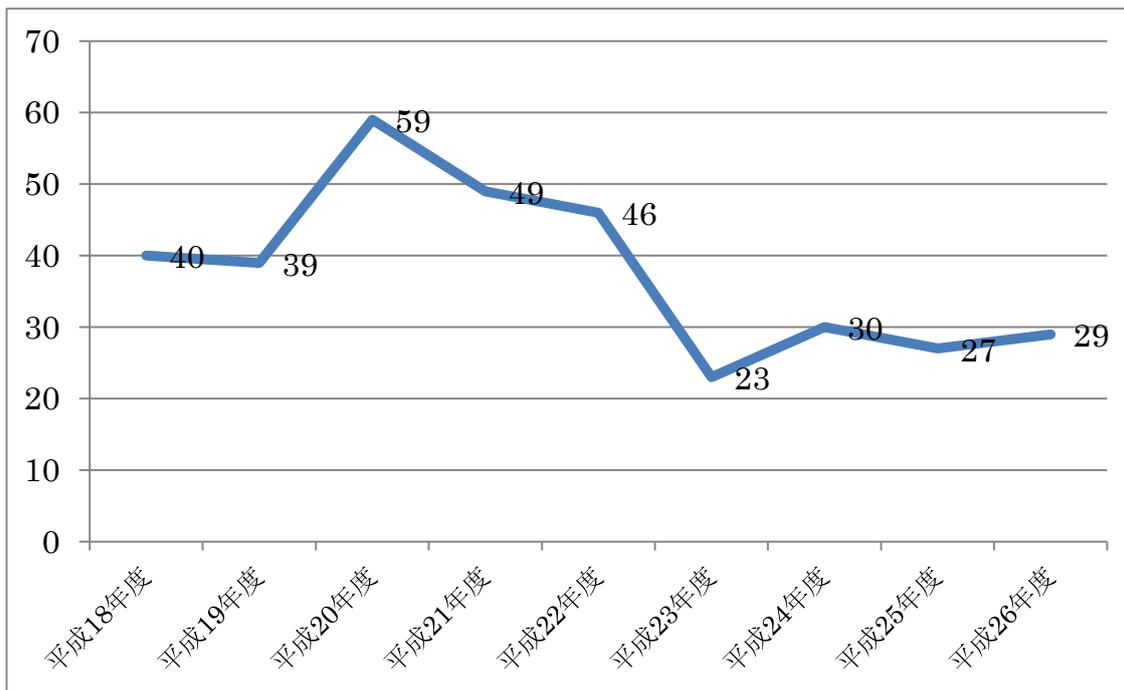


図1 参観者数の推移

本年度の授業参観は、参観者数を増やすため機会の増加を目的として前・後期に渡り実施した。参観した教員数については微々たる効果しか上げられなかったが、15名の教員はどちらの期にも参観を行っており、参観機会の提供は各教員にとって意義のあるものであったと判断しても良いと考えられる。来年度の授業公開にむけては、公開授業を各教員に提供していただいた上で、参観者が他の授業に興味がある場合はその授業の参観も行えるシステム作りを行い、より多くの教員が参観できるよう参観機会の拡充を計りたい。

3章 教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウム

1. FDシンポジウムの目的

本シンポジウムの目的は、以下の2点である。(i)学生の視点から授業活動の実態を調査・報告し、授業改善策を提供すること。(ii)教育改善活動が今後も継続的に行えるよう、改善策を文書として蓄積し活用すること。

2. FDシンポジウムのテーマ

シンポジウム開催前の準備段階において本FDシンポジウムのテーマが学生FD委員会と協議され、下記の3つが提案された。いずれも「大学をよりよくするために」という視点で共通する部分があるために選ばれたものである。

- (1) 時間割に関して (2) 履修に関して (3) 授業に関して

3. スケジュール

日時：平成26年12月9日（火）

- | | |
|------------|-------------|
| (1) 受付 | 13:50～14:00 |
| (2) 基調報告 | 14:00～14:30 |
| (3) グループ討論 | 14:40～15:40 |
| (4) 全体報告 | 15:50～16:50 |

4. 基調報告

グループディスカッションを円滑に行うことができるように、教員2名（錦織委員、濱崎委員長）によりテーマの内容に即した基調報告がなされた。錦織委員からは、教育学部の教育職員免許法に則った教育学部のカリキュラムの特徴、授業の種類の解説をもとに時間割作成の現状、他大学の状況の情報提供がなされ、単位上制限の趣旨と現状や、履修指導体制の説明がなされ、履修の仕方に関するアドバイスがなされた。濱崎委員長からは、FD活動の解説がなされ、鹿児島大学全体のFD活動でも重要視されているアクティブ・ラーニングや協同学習の理念についての説明がなされた。

5. グループ別討論会および全体報告会

各グループの基本構成は、学部3年生を中心に学部1～3年生6人、教員1～2人、大学院教育学研究科学生1人程度の計6～8人であった。それぞれのグループで出された学生の意見は以下の通り。

(1) 時間割に関して

- ・必修科目がある時間に密集していて困る。学部全体で調整してほしい。
- ・人数制限のある授業の抽選の仕方に問題があるのではないかと。
- ・共通・教職科目が問題であることが多い。
- ・単位の上限を緩和してほしい。
- ・教務係・学生係の担当（履修、実習、免許）分担を明確にしてほしい。
- ・実習校の希望をとってもらえないか。実際に実施している学科もある。家が遠く、交通手段がないという人がいた。

(2) 履修に関して

- ・『教育課程』を分かりやすくしてほしい。専修ごとに冊子を作ることで、関係のある内容だけに絞るとか、ネットに『教育課程』を上げるような工夫がほしい。
- ・カリキュラムの変更が多いので、変更を少なくしてほしい。
- ・相談窓口がほしい。
- ・初等・中等コースの選択は実習後にしてほしい。実習を経験することによって取得したい免許がはっきりするので。

(3) 授業に関して

- ・一方的な授業や、要点が分かりづらい授業がある。

- ・アンケートが活用されていない。記述式の質問も入れてほしい。
- ・テストが少ないし、易しい。レポートが難しいときがある。
- ・レポート等はちゃんとフィードバックしてほしい。一言でもコメントがほしい。
- ・シラバスが明確でないものがある。
- ・評価基準がはっきりしない授業がある。疑問に思ったことを聞きにくい雰囲気。
- ・授業の雰囲気がよくない（遅刻者が多い、全体的に緊張感がない）。
- ・実践的な学びがやりたい（教育現場観察，指導案作成，模擬授業等）。
- ・実習や演習とのバランスをよくしてほしい。

(4) その他

- ・喫煙所を設けてほしい。

《改善案》

- ・初回の授業で、昨年のアンケートを受けてどのように改善したのかを学生に伝える。（無理なら無理で、授業の変更）
- ・教育学部だからこそ、知識の享受だけでなく（どう活かせるのか）専門的なものも入れてほしい。
- ・学生の目的に合わせた授業にする（免許をとるために受けている授業なら、それなりにその目的に合わせて）。
- ・資料・板書等は、多すぎても少なすぎてもよくない。
- ・講義形式ではなく、参加型の授業を。
- ・評価、一言でもほしい（フィードバックの方法，授業の最後に何か書く紙，気になったこととか）
- ・学生側が意欲をもてば，受け身の授業にならない。学生間の授業に教師が助言を与える。

4章. 学生 FD サミット 2014 夏

日時：2014年8月23日(土)～24日(日)

会場：京都産業大学キャンパス(京都市北区)

1 活動内容

1 日目 8月23日(土) 【受付10:00～】

10:30～12:00 オープニング(1. 各企画説明 2. 事務連絡)

12:00～13:00 昼食

13:00～15:00 ポスターセッション

15:30～17:00 しゃべり場

17:30～19:00 懇親会

2日目 8月24日(日) 【受付10:00～】

10:30～11:30 オープニング

11:30～12:45 昼食

12:45～15:00 分科会(「学生FDはじめてみました」、「一目瞭然!みんなで貼ろう授業アンケートのイイネ!」、「これさえあれば安心!!学生FD広報ガイドをつくろう!!」、「ファシリテータのしゃべりバナレに次の一手」、「学生FD七転び八起記～こんな失敗しちゃダメよ～ダメダメ!～」)

15:00～16:30 未来への招待状 エンディング

2 活動詳細

*ポスターセッション

ポスター発表全体を通してみることで、学生FD委員の発足から発展に至る過程の一般的な傾向が読み取れた。まず発足当初は授業アンケートの実施や空き教室の開放、新入生との交流会といった比較的取り組みやすい活動から開始される例が多かった。発足から数年経ったグループでは、同じ内容の活動を毎年繰り返すことになり、FD活動の目的や方向性に迷いが生じていることを開陳するポスターが多かった。さらに、ある程度の歴史を持つグループでは、それまでの経験を活かして、外部の有識者を招いた講演会やワークショップの定期的開催をおこなうといったように順調に活動しているグループが多くなっていた。これらから、学生FDが十分に発展していくには発足から数年目の停滞期に今後の方向性をどう決定するかが重要になってくると考えられる。

また、興味深い視点の発表を岡山大学のFDグループがおこなっていた。学生FD委員はいわゆる「意識の高い」学生が参加するため、学生FD委員の意見を学生全体の意見の反映と捉えると偏りが生じてしまう。すなわち学生全体の意見のランダムサンプリングとはならない。そこで、トップダウン方式で学生FD委員のメンバーをランダムに決めてしまうことで、この偏りを無くそうという活動が紹介されていた。しかし、必ずしもやる気のある学生が選出されるわけではないため、この活動がどこまで発展継続していくのかはまだ不明である。

*しゃべり場

しゃべり場では7人程度のグループとなって「大学を良くするためには何ができるのか」というテーマについて議論をおこなった。まず議論のたたき台として、理想の大学と現在の大学への不満を提起することからはじめ、その不満を解消するためにはどういった方法があるのかを議論するという流れで進められた。

大学への不満は大きく分けて施設面への不満と授業に対する不満とに大別された。施設面への不満に関してはその都度大学の該当部署に一つ一つ問題提起していくしか無いということで議論は収束した。授業の不満に関しては、シラバスと実際の授業内容の不一致や教員による授業の質の違い、授業アンケートによる改善が見られないといった内容が主なものだった。授業に関しては議論が紛糾しなかなか統一見解は得られなかったが、教員との対話機会の増加や学生の意見を教員に届ける方策を作るといった比較的常識的な意見に落ち着いた。

*分科会 一目瞭然!みんなで貼ろう授業アンケートのイイネ!

5 件の分科会が開催されたが、私は授業アンケートについての分科会に参加した。京都産業大、札幌大、名古屋大の演者がそれぞれ発表をおこなった後に個々の内容について議論をおこなうという形で進行した。

まず授業アンケートにおける「良い授業」という点について学生と教員の意識に乖離があることが説明された。調査の結果、学生の考える良い授業とは授業のやり方(プレゼンテーションの方法)が優れたものであり、教員は授業内容の良さを重視していることがわかった。

次に授業アンケートの問題点として、学期末にアンケートをおこなうと自分ではなく次の学年にしか反映されないといった意見や教員の人気投票にしかならない、教員からのフィードバックが見られないといった不満が紹介された。

これらの不満に対して、授業アンケートを中盤におこなう、アンケート内容に対して教員が授業中に回答する、教員評価的な質問項目から授業評価的な質問項目に切り替えるといった対策が紹介された。また、選択式の質問だけでなく、授業で理解が困難だったキーワードや専門用語を書く欄を設けるという例もあった。

全体を通して授業アンケートを活かすには、質問項目の厳選と教員からのフィードバックをいかにおこなうかについて工夫する必要があると感じた。

5 章 平成 26 年度教育学研究科教育改善のための意識調査

1. はじめに

今年、本学大学院教育学研究科が改組され 6 年目である。社会及び学術的には、青色発光ダイオードの発明で日本人 3 名がノーベル賞を受賞し、改めて日本におけるアカデミックな水準が認められた年であった。しかし他方、スタッフ細胞を皮切りに研究者の剽窃・データねつ造など汚点も少なからず見られたこの 1 年であった。このような中で、鹿児島大学教育学部研究科として、優秀な人材を放出し、そのための研究条件の改善は必須となっている。

改組されてから引き続き、院生への意識調査をおこない、昨年度の特に「院生室使用時間の延長」の要望があつた。その結果、院生室の使用時間の延長が認められ、研究条件の一部が改善されたと思われる。同様に昨年度の意識調査からは授業内容・授業形態・研究・学習環境に満足していた結果が得られている。

しかし、研究・学習環境の面では、研究室自体の環境・整備にはまだ課題があると思われる。また、「院生」の学際的な位置づけとして情報が与えられているか、研究の支援の在り方を今後視野に入れる必要があると思われる。

以上の課題点を明らかにするため、本年度は、意識調査を引き続き実施し、教育改善の分析に務めることとした。

2. 意識調査の実施方法

平成 26 年度の教育学研究科大学院生による授業改善意識調査を以下の手順で実施した。

- (1) 調査期間:平成 27 (2015) 年 1 月 14 日 (用紙配布開始) ~2 月 6 日 (回収締切)

- (2) 対象:教育学研究科全学生 76 名を対象とし、回収は 11 名（1 年生 7 名、2 年生 4 名、計 11 名）であった。
- (3) 手法:意識調査質問紙（別紙 1・2）にて自由記述及び選択解答とした。
- (4) 配布方法:研究室・修士論文提出時及び修士論文発表時に配布
- (5) 回収方法:回収 BOX を事務室に設置した。
- (6) 集計方法:2015 年 2 月末に集計および分析を行った。

3. 意識調査の質問項目

調査項目は、Ⅰ 諸科目の授業に対する意識調査 ①「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業、②「学修コース専門科目等の授業、③研究・学習環境について、満足している点とその理由、改善してほしい点とその理由を自由記述式で回答を求めた（別紙 1 参照）。

Ⅱ 今後の研究についての方向性 ①修士論文発表・中間発表について ②執筆について ③学会所属について ④その他、要望・意見についてで、主に 3 択で回答を求めた（別紙 2 参照）。

4. 調査結果

Ⅰ 諸科目の授業に対する意識調査

(1) 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業について

1) 満足している点

表 1 は、「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業における満足している点である。なお、重複する回答は表記せず、回答内容を箇条書きにして記している。

表 1 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業における満足している点

<p><授業内容面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・専門外のことを広く学んだ ・小学校専修免許のための単位になったのでよかった ・現職の先生方と話ができて勉強になった ・先生方が親切であった
<p><授業方法面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校現場での事例の紹介 ・少人数でのグループワーク ・自分の意見を発表する機会 ・ディスカッション等の話し合い活動 ・オムニバス形式で、多様な領域が学べた

上記のとおり、多様な専門性を有する教員によるオムニバス形式という本共通科目の特色は、内容面・方法面において、大学院生たちから評価されている。また、とかく机上の研究になりがちであるため、学校現場による学習内容（事例紹介や分析等）や相互の意見交流については、各自の研究において視野を広げ、展望を見いだせるという教育的・研究

効果があると思われる。とりわけ、授業方法面においては、少人数のグループ活動において多様な学びが展開されている様子が推察される。

2) 改善してほしい点

改善点については、授業内容面、方法面、その他の3つに類型化された(表2)。授業内容については、分野が広く、多様な知識が得られる反面、「理解が難しい」、分野が違くと理解が困難である等、といった意見もあった。また、共通科目でありながら専門性が高い点がある一方、もっと深く専門性があるとよいという意見もあった。また受講生(大学院生)の属性(現職教員や社会人)に対する配慮等を望む声が見られた。

授業方法については、グループ編成の方針について、要望が出されている。現職や専攻分野といった異属性からなるグループ編成のメリットはあるものの、時には、同じような属性でグループを編成することで、学びが深まるのではないかという意見であった。

なお、その他の事項として、授業時間に関する要望がなされていた。終了や開始時間を守ってほしいとの要望や、時間帯を検討してほしいという要望である。評点に関する要望や教室環境に関する要望もなされている。これらは、昨年度からも同様なので至急改善をする必要があると思われる。

表2 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業における改善点

<p><授業内容面></p> <ul style="list-style-type: none">・研究者になるための学習内容もあってよいのではないか・分野がひろく理解が難しい・もっと深く専門性があるとよい・他学部とのコラボレーションで教育以外の学びもあるとよい
<p><授業方法面></p> <ul style="list-style-type: none">・現職教員が中心になっている・社会人もいるので配慮が必要・ディスカッション時に毎回似たようなメンバー構成であった・先生により、決め方や、進め方が違うので戸惑う
<p><その他></p> <ul style="list-style-type: none">・教室が狭いので、もっと広いところで行いたい・時間厳守でお願いしたい・5・6時間目が多い

(2) 「学修コース専門科目」の授業について

1) 満足している点

研究科共通科目と同様に、授業内容面において、多様な分野からの知識・情報が得られていることがわかる。また、オムニバス形式は、浅くて嫌いだという意見がある一方、幅広く学べるという利点を指摘している(表3)。

表3 「学修コース専門科目」における満足している点

<p><授業内容面></p> <ul style="list-style-type: none">・他分野の学習内容から視野が広がった・オムニバス形式は幅広く学べる・少人数なので詳細に指導してもらっている・専門性・最新である・グローバルな学びができた
--

2) 改善してほしい点

「授業内容」からは、「理論上の観点・問題点」を明らかにしてほしいとの要望があった。これは、研究としては最も大事な観点であるので、院生と話し合いながら研究の到達点を伝えていく必要がある。

表4から、他に授業時間厳守に対する改善要望が寄せられている。他にグループ編成の在り方や課題の与え方にも、要望をよせている。

表4 「学修コース専門科目」の授業における改善してほしい点

<p><授業内容></p> <ul style="list-style-type: none">・理論上の観点・問題点を明らかにしてほしい
<p><授業方法・その他></p> <ul style="list-style-type: none">・現職教員よりも、学生の方がグループの中心的役割を担った方がいいのではないかと。・時間厳守をお願いしたい・オムニバス講義で、各分野レポート課題が多い

(3) 研究・学習環境について

1) 満足している点

研究・学習環境について満足している点(表5)を見ると、個々人の研究環境(研究室や空調、研究のための器材等)について、院生たちは、およそ満足していると考えられる。

表5 研究・学習環境について満足している点

<p><環境面></p> <ul style="list-style-type: none">・院生用の研究室がある・研究室の利用時間の延長・研究スペースが確保されている・長時間実験ができる・研究環境が良かった

2) 改善してほしい点

研究・学習環境について改善してほしい点(表6)は、研究環境面、施設やその利用面、その他の2つに分類した。

研究環境面についての中心課題は、研究室の「広さ」の確保であると思われる。機器や

備品利用、資料収集面での要望が指摘されている。また、研究時間の確保から、必要なメール発信への要望があった。そして、その他としては、教育学部独自の図書館がほしいとの要望である。理由は、現図書館への通行に時間がかかることと、教育の専門書の充実を要望していた。

表6 研究・学習環境について改善してほしい点

<p><研究環境面—施設やその利用面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要なメールが来ない(集中講義の日程・入校許可申請) ・信頼できる掲示板づくりとメール発信をお願いしたい ・プロジェクターの機能が弱い ・パソコンを支給するか、貸与してほしい ・個々人の研究スペースが狭い ・全員が入室するには狭すぎる ・給湯室がほしい
<p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育学部独自の図書館がほしい

II 今後の研究の方向性について

これまでは、研究条件としての環境整備が中心であった。今回はそれらに加え研究の中心と思われる「発表・執筆・学会加入」について意識調査を行った。

(1) 学会発表・中間発表について

口頭発表を学会など(学内ではなく公の専門機関)で行ったかどうかの質問をし、回答を「すでにした」「する予定である」「予定はない」の3択の中から選んでもらった結果、「すでにした」が2年4名のうち2名であった。1名は「する予定」、残り1名は「する予定はない」であった。1年生の場合「する予定はない」が7名中6名であった。1名だけが「予定」であった。

今回は学外の発表についての質問であったが、学内外を問わず、発表をすることにより、プレゼンテーション力をつけ、研究内容の指導・援助として批判にこたえうる内容により発展できるので、「学会の発表」を目標にするよう支援することを研究科も検討したい。

(2) 今後の執筆について

指導者側は、院生の成果を活字として、世に出し、かつデビューさせることは大きな役割を担っている。そこで、今後の執筆について「すでにした」「する予定である」「予定はない」の3択から、回答してもらった結果、2年生4名中3名が「予定はない」という回答であった。1名が「予定がある」と回答した。1年生の場合、同様に質問した結果、3名が「する予定である」、4名が「予定はない」という回答を得られた。(1)の学会発表の回答を合わせてみると、1年生の場合一般的には「発表」→「執筆」という順を理解していないか、または知らされていない、という状況が分かった。今後、担当教員は、院生の

希望である「執筆」に関して、研究に対しての基礎的な情報を支援・指導する必要がある。それにしても2年生の執筆予定がない、という回答は大変残念である。

また、執筆予定者は、「共同執筆で院生名次に指導教員」の連名を望んでいることが分かった。自然科学と社会科学および人文科学のそれぞれの分野・学会によるが、いかに共同研究であろうとも「院生名次に指導教員名」というのが、一般的であろう。教育学部学術的研究発表の場として「実践紀要」「教育学部紀要」の著者を見る限り、院生執筆はまれに見るだけである。このような状況下で、院生の名前を筆頭者にし、業績を積み上げることを今後院生支援としての「大学院紀要」の発行を提案したい。

(3) 学会所属について

学会所属に関しては、「学会に入会している」院生のうち、2年生4名全員が「入会」していた。それに対して1年生は、7名中3名が「していない」、4名は「わからない」であった。今後指導教員の指導があると思われるが、「学会」に対しての所属意識が低いと思われる。

その意識を高めるためには、1年次から学会に所属し、学術的な交流と視野を広げることが急務である。これも、専修・コース並びに指導教員の意向によるものであるが、少なくとも1年次から「学会とは何か」などレクチャーをする必要があり、自らの研究がどのような位置づけなのかを明確にすることが求められる。

5. 総括

当調査から、「研究科共通科目」や「コース共通科目」、「学修コース専門科目」について、その授業内容や方法は、大学院生たちの学びに資していると考えられる。「専門性の高い授業内容」や「幅白い意見や知識の吸収」、「他分野の学習内容から刺激を受ける」といった回答項目がその証左である(2011年同様)。

課題としては、多様な分野の共通科目としての内容レベルや、学校での教育実践との関連性や学術性について、受講生たちが改善を要望している点が挙げられる。「分野が違い過ぎて理解が難しい点もある」、「専門性が高く、かつ多様・多岐にわたる」の回答項目が前者に、「教育現場において実践できる内容」や「教職に関連する内容に偏りすぎているのではないか」や「研究者になるための学習内容もあってよいのではないか」といった回答項目が後者に属する((2011年同様)。

また、こうした評価点と課題点の表裏一体的な関係は、授業方法についても、同様である。「少人数でのグループワーク」や「ディベート等の話し合い活動」が評価されているものの、「グループメンバーを固定化しない」「他学部とのコラボレーションで教育以外の内容も」といった改善点も寄せられている。

ところで、鹿児島大学大学院教育学研究科教育実践総合専攻は、今後教職大学大学院として新たに出発に期待がかかっている。こうした設置の意図から考えるに、上記の表裏一体となった評価点と課題点は、専門性の向上と異分野融合という本研究科の特色を反映していると考えられる。こうした特色について、履修案内に記されているものの、ガイダンス時や共通科目時等において確認していく必要がある(2011年同様)。

研究・学習環境については、研究室の時間延長など評価されていることが明らかとなっ

た。しかし、専修・コース別によって評価が異なり、個別研究室が与えられている場合はよいが、そうでない共同研究室の場合の個人のスペースはまだ、十分とは言えない。さらに、研究支援の向上としては「給湯室の確保」「パソコンの貸与」など新たな機器及び施設の要望への対策が必要である。

今回は新たに社会問題として起こった剽窃・データねつ造などの背景をもとに意識調査を通して、院生の本来の中心課題—「学会所属・学会発表・執筆」という研究過程を問題とした。その結果、研究科入学時からこれらの所在と自らの研究をクロスさせ、自らの研究を向上させる必要性が明らかになった。そのためには、男女共同参画室が行っている「メンター制度」の活用のほか、留学生も視野に入れた、専門的に業務を行う常時相談窓口や相談員配置が必要である。